

## 近代の福祉に生きた女性パイオニア(その8)

—フローレンス・ナイチンゲールとジェーン・アダムス—

鈴木 真理子

## Women Pioneers Who Lived for Social Work (8)

—Florence Nightingale and Adams—

Mariko SUZUKI

Despite of the great Depression, Adams continued her movements for women suffrage. She did not persist in complete equality between men and women in order to support special features of women such as delivery and childrearing. At this point, Adams seemed to have a quite flexible thought, but in private she was so conservative that she never drank alcohol. This conservativeness in life-style is one of the common factors with Nightingale, who had no interest in having a relationship with men.

Late in Adam's life, she was nominated for one of the seventh greatest Americans, in which Lincoln was also nominated. Her fame only increased, but on the other hand the death of her best friend, Mary Smith, was such a tragedy that she nearly lost her will to live. No sooner had she been awarded the Nobel Peace prize in 1931, she passed away by cancer.

In this chapter, it shows how the two made their achievements for independence of women through their lives. There are some similarities in the image of ideal woman that Adams and Nightingale each had. They both evaluated the function of women, especially delivery and childrearing, as essential roles in society. They innovated this function to enrich the lives of women and to bring social independence to women. Adams found the way to socialize this particular role of women in pacifist movements and social activities, and Nightingale ensured the status of nurse as a special occupation. They were headed for the same goal in different ways. Neither was married or had own family, but they could point out the importance of supporting lives of family. As a result, their effects were remarkable to numerous women and still they are. Their thoughts might sound conservative and old, but Adams and Nightingale had faith in women to seize their independence by participating in society. This can also be a rediscovery in function of women in the society of today.

### 第7章 社会事業と看護の根源的共通性

#### 1 女性の仕事“命と暮らし”

—女性の平等を求めて—

1920年、女性の選挙権を与える憲法修正案が施行さ

れるに当たってアダムスは、長年の運動の成果と大変喜んだが、平等権利に関する修正案には時期尚早と反対している。これは『平等の権利はアメリカ合衆国において性の違いにおいて縮小されたり、奪われたりしない』という現代ならしごく当然のことであるが、当時アダムスたちが立法化しようとしていた婦人保護の

法令と矛盾することになるからであった。アダムスは女性の権利平等を擁護してはいても、女性の特質、子供を産み育て、家庭をまもるという負担を保護する労働条件の場合のみであった。つまり家事と育児を前提としての女性労働であり、当時の急進的女権論者からは差別主義とも保守的とも言われた。現代のようにILOのあらゆる差別の撤廃条約、機会雇用均等法などで公では労働の男女平等化が前提としてあり、その上で育児休業法、産休制度などが設けられる一時代前、女性は家事や出産育児の伝統的な束縛から解放されていない時代であった。その保守主義は道徳主義とも一致し、思想的にあれば柔軟に社会主義もコミュニスト（共産主義者）も擁護したのに、アルコールについては禁酒法<sup>1)</sup>支持で、自分自身一切アルコールを嗜まなかった。これはクエーカー教徒としてのアダムス家の名残であろう。

しかし時代と風俗の変化は著しく、ハルハウスの活動はもはやその時代のソーシャルワークの指導的位置を他に譲り、若き女性の手本となるものはもはやなかった。というのはハルハウスのレジデントたちの活躍で、ソーシャルワーカーが公務員や専門職として公立の機関に属するようになり、民間社会事業施設も人件費のやり繰りが大変になってきたのだ。ハルハウスのように裕福な地主や事業家の寄付、そしてアダムスのような資産家の活動家はかりとは限らなかったからだ。

アダムスはもはやセツルメント運動に一頃のような情熱を失い、セツルメント活動もその多くの役割を少しずつ公共の機関に譲り渡し、社会事業での時代的役割を縮小していった。そして1890年以降のハルハウスの黄金時代、アダムスがあれほど精力をつぎ込んだハルハウスの活動を第二部、『ハルハウスの次の20年』としてまとめ、隆盛期へ郷愁を込めて1910年出版している。

#### －世界的栄誉、ノーベル平和賞－

アダムス個人の晩年は戦争反対による不遇な時代を乗り越え、名誉は増すばかりであった。著名な婦人雑誌“グッドハウス・キーピング・マガジン”において、「アメリカの偉大な12人の女性」のうちの一人にノミネートされ、「アメリカの歴史上の偉大な7人」にもヘンリー・フォード、リンカーンなどと並び称され、WILの会長も長く務めた。これらの賞の多額の賞金をWILや母校ロック・フォード、ハルハウスなどに寄付

して、それらの運営資金として財政難を救った。

しかしもっともアダムスが待ち望んで栄誉とした偉大な受賞は、ノーベル平和章賞である。過去10年間にわたり候補にあがっては最後まで残れなかった名誉ある賞は、1931年、ついに第一次大戦前後の平和運動の功労を評価して贈られた。受賞式には腫瘍の手術をするため出られなかったが、ノーベル賞の賞金<sup>2)</sup>は、アダムスの関係する多くの団体に寄付され、おりの大不況で資金難に喘ぐ、非営利団体の運営資金となった。

時代は大不況の真っ只中、失業者が溢れ政府は不況対策としての公共投資であるニューデイル政策<sup>3)</sup>を打ち出し、アダムスもそれを支持した。いまやWILで活動して世界を歩き回る体力もなく、身近なアメリカ国民の老人年金問題、スラムの貧困者たちの住宅整備計画を支援する程度で、友人、メアリー・スミスの家て晩年を静かに過ごした。しかし、次第にきなる臭くなる日本の満州侵略、ドイツのナチスの台頭など世界の情勢を知るにつけ、自らの生涯をかけた平和の行く末には憂慮、懸念を隠さなかった。

そして1934年、最後まで最良の同僚であり友、姉妹でもあり恐らくパートナーでもあったメアリー・スミスが肺炎のためなくなった。身内に自分の心臓を止めてしまおうと思ったほど、ショックを受けたと語っている。社会のために国家的地位で活躍した過去の同僚たち、ラスロップ、キリー、その他ハルハウスのリーダー的存在ももはやこの世をさっていた。しかし他の仲間とは君主の交わりのごとく、さらりと距離をおくアダムスも、メアリー・スミスだけは一番心の許せる情緒的に結ばれた仲間であった。

大きな旅行には必ず付き添い、夏の休暇も一緒にとり、離れている時は愛情溢れる手紙をやり取りしていた。アダムス自身が二人の“解放された愛”と名付けている関係は、他人には推し量れないかけがえのない親密な友情であった。共に結婚をしていないかわりに、40年間よき仕事と人生のパートナーであった。翌年1935年、メアリーが亡くなって1年後、WILの20周年記念式典で、エレノア・ルーズベルト<sup>4)</sup>に称賛されてスピーチをしている。「WILは数百年の間、戦争を法律で代え、暴力を政治的行為に代えるために尽力した人々が長い列をなしている。これに連なる努力を、少なくとも我々の誠実さを、評価してくれる世界中の様々な国からの友人に心から感謝する」この最後のスピーチを残して癌の進行と闘う力も尽き、1935年、5月21

日この世を去る。メアリーの死後、1年と2カ月後であった。

葬儀はハルハウスで行われ、少年のブラスバンドや住民数千人に見送られ、生まれ故郷シダービルのアダムス家の墓に葬られた。墓標には『ハルハウス並びに国際平和と自由女性連盟のジェーン・アダムスここに眠る』と刻まれている。これはアダムス本人が選んだもので、彼女の3つの功績を表している。

#### －女性の地位と身分差別－

「英国においては女性の労働の道は数も少なく狭く人が溢れだしている。そのためロンドンなど大都市では公然と身を売っていきっている女性も大勢いる。また昼は労働に従事し、夜になると罪を犯すというおぞましい中間地帯をさまよっている女性も大勢いる。職の不足、不十分な賃金、保護と抑制の欠如などが原因となっているのである」<sup>5)</sup>とナイチンゲールも指摘した女性の状況をなんとかしようと、ビクトリア朝後期(1837－1901年)には女性解放運動がおおいに盛り上がりを見せた。婦人参政権、売春禁止、母性保護、女子教育の必要性などが注目をあびた。しかしナイチンゲール自身は「今の時点では最も重要なことは、大勢の人々の悲惨さを軽減することと、恐ろしい罪を犯す機会と誘惑を抑制することに焦点をあてるべきこと」<sup>6)</sup>のように、男女平等、女性権利拡張論者ではなく、伝統的な女性の貞淑さと自己抑制に傾いている。1900年の約50年後、「かつては家庭にしばり付けられていた奴隷にしか過ぎなかった女性は、今では家庭の導き手である。その女性が傲慢な『男女同権論者』になって、その資格を失うようなことがないよう」<sup>7)</sup>と厳しい警告を発している。

見習い看護婦には職業人として自覚すること、家庭にあって指導権を発揮しても良いが、男女同権論者になって声高に平等を主張しないよう、主義主張をまくし立てるより、仕事の中で実践して地位を確立しろという不言実行型の勧めであろうか。これは多分にナイチンゲールの好みによると思われるが、彼女自身垂範の人であり、主張は理詰めの説得、または数字による論証、表現や言い回しの卓越した手紙、報告書や著述によって世論に訴える手段をとり、演説や扇動によって感情や一時の興奮に訴えるタイプではなかった。一方アダムスはナイチンゲール同様、著作や論説などの文章の才能を自分の立場を世間にアピールする手段に

も発揮したが、集会や会議でのスピーチでも扇動的ではなく、深く心をつかむ雄弁さをもっていた。これはおかれた時代状況の違いにもよるが、多分に二人の受けた教育とパーソナリティの違いであると思われる。ナイチンゲールの教育はすべて上流社会の子女教育の典型のごとく、家庭教師や父親の個人教授によるもので集団教育ではなかった。つまり大多数に訴える訓練を受けなかった。それに比べアダムスは寄宿学校において、同年代の集団討論や弁論大会など、デバード、スピーチの才能を多分に磨いている。

現代ではナイチンゲールのように、看護婦は皆控え目で、職務、医者に常に服従、忠実でなければならない理由はない。その向き不向きによって、リーダー、渉外、記録、補佐役などと様々な役割があって良いはずで、男女同権論者の方がむしろ好ましい。ナイチンゲールの時代では男性優位の壁は厚く、徒に閑(とき)の声をあげて他の大勢の看護婦の忍耐を無にしないようにという老婆心であろう。現代女性の地位も完全に平等とは言えないが、過去の女性パイオニアたちの苦労の上に築かれたものという認識は必要であろう。

周囲の忠実な男性は叱咤したナイチンゲールであったが、一般社会の男女の役割については、アダムス同様かなり保守的ではあった。しかし階級制度については批判的で、自らの上流階級という優越した階級性には頓着せず、自ら看護婦となり、私費を投じて専門看護婦を育てたナイチンゲール自身の生き方に平等思想は体现されていると言えよう。

つまりナイチンゲール自身は階級差別とは無縁の価値観を確立していた。それは、インドのカースト制度がインドの貧困と飢餓の要因であると著書の中でふれているが、社会的偉業を成し遂げる人間に共通した特徴であるが、氏素性とか階級とは別の人間判断の基準をもっていた。「最低の教育しかうけてない人々の中にも、その文字、文章から高い教養が伺える人々より、遥かに優れた看護への適性をもっている」<sup>8)</sup>

また肉体労働と頭脳労働の上下の物差しからも自由であり、むしろ偏らず両方を兼ね備えた仕事を理想的としている。ナイチンゲールは「昔かたぎの優れた女性として洗濯屋や酪農場の女主人や病院の婦長」<sup>9)</sup>などをあげ、逆に夜な夜な人ごみの舞踏場で踊り、化粧や華美に身を委ねる貴婦人には価値をおくどころか批判さえしている。<sup>10)</sup>

「自分の衣装さえ一人で着られない立派な貴夫人も

実質的には病人と同類である」<sup>11)</sup>「近ごろ召使の質が落ちてきたといわれるが、私にいわせれば女主人の質が落ちてきたのだ」<sup>12)</sup> ナイチンゲールが、いかにある種の同性には厳しかったかよく表している。そして母と姉はまさにこの種の女性であり、いかに家族との葛藤が大きかったか推測されよう。ナイチンゲールの毒舌と皮肉の鋭さは止まるところを知らないが、この批判精神こそ彼女の生きる力であり、内面の気性の強さを物語っている。

### －福祉と看護の究極的目的“命”－

アダムスもナイチンゲールともに女性が職業をもつことが重要だと強調した。そしてナイチンゲールは特にそれが有給であることを重要視した。「女性の皆さん自立しましょう。自分の足で立ちましょう。それには職業をもつことです。女性の生涯で出会う4分の3の災難は職業をもっていれば避けることができたはずです。そしてこの世で最も幸福な人は、自分の職業を愛する人で、自分の人生に最も感謝の念を抱いている人です」<sup>13)</sup>

そして若い女性に最も適した仕事は看護婦であると呼びかけている。「その良い職業、世の中の職業のうちで重要な仕事である看護を選ぶことを勧めます。自分の全力を投入しなければならない仕事。看護。よきサマリア人でありたいクリスチャンの生きる姿勢とぴたり一致する職業、看護がまさにそれです」<sup>14)</sup> そしてそれまでの看護婦の社会的地位の低さを改めるために、その専門職としての技術の高さを強調した。

「医学教育を受けていないのに医師を職業とすれば、にせ医者と呼ばれます。訓練を受けていない看護婦はなぜにせ看護婦と呼ばれないのでしょうか。看護管理をしたこともない女性が婦長を引き受けるのは、数学を学んだこともないのに数学の教授を引き受けるようなものです。本当の看護は容易な仕事ではありません。女性であれば誰でもができるなどと考えるのは大間違いです。看護を職業とするには訓練を受けねばなりません」<sup>15)</sup> このように 看護婦の資質への期待水準はナイチンゲールにとってとても高かった。

「看護そのものは、病人のベッドサイドや病棟内においてのみ教え得る。それは講義や書物を通して教え得るものではない」<sup>16)</sup> まず看護とは社会福祉の援助職同様、理論よりまず実践である。そして実践の上に則った職人的とでもいえる共感による癒す力、これを祈り

とか思いとかの言葉で片付けるのは簡単だ。しかしナイチンゲールにかかっているのはこの看護の心さえ、信念によってまさに人間科学になってしまう。「看護については『神秘』など全く存在しない。よい看護というものは、あらゆる病気に共通する細々としたこと、及び一人一人の病人の固有のことを観察すること、ただこの2つだけで成り立っている。」<sup>17)</sup>

そして看護が実践科学であると同様、社会福祉援助も実習訓練が重要部分を占める実践技術である。しかしその一面、共感能力や癒す力によって対象者の意欲を導き、生活や社会に適応させるという生命ダイナミズムの神秘的世界でもある。そして看護の訓練と同じように言動、行動、技術を範として見習い、実践と経験が資質と専門性を磨いていく。

ナイチンゲールは「看護とは観察に始まって観察に終わる」という意味のことをよく書き残しているが、「看護とは何か、看護婦とはどのような存在か」という言葉に集約される。この観察は自然科学的な客観的に突き放した観察とは多少ことなり、「臨床の知」とも言える、患者の立場にたった配慮、勘といったものに通じる。現在のように科学技術の粋を集めた医学機器での検査で生理的機能のすべてが把握できる状況ではなかったので、容体の変化には観察による素早い処置が患者の生死を左右した。

「故意にあれ偶然であれ患者を絶対起こさないこと。寝入りばなにおこされた患者はもはや眠れなくなる」「優れた看護婦は一時間ごとに暖かい湯たんぽを足元に入れ換えたり、指示された滋養食を与えたりするが、眠っている患者をうるさからせないばかりか、むしろ心を和らげながらてくるものである。」<sup>18)</sup> という記述のように、看護婦の言動は患者のその時点の生命力の消耗を最小限に押えるよう配慮されたものでなければならぬし、その生命力を最大限に回復にむけるようケアするのが看護ということになる。

現代の人工臓器や生命維持装置、はては臓器移植などは、この患者の潜在的生命力を生かす医学とは程遠く、ナイチンゲールであつたらなんと云ったであらうか。とにもかくにも、彼女の生きた時代、彼女の思想からすると、自然の摂理によって与えられた条件、可能性をフルに生かすことが看護であり科学であつた。そのために貧困や病気などの悪条件は人間の叡知を駆使して取り除かねばならないが、おのずからもって足

るべき限界があるということだろう。

クリミアの戦場で、また陸軍改革で軍の上層部を敵にしても妥協せず恐れず突き進めたのは、当然生かされる生命は救わねばならぬという、自分の正当性を確信していたからである。それはアダムスの平和主義にも通じる。第一次大戦への開戦に色めき立つヨーロッパの国々に平和を説得に回ったり、戦火の国々に物資をおくったり、同胞が参戦の興奮にあっても一人非国民の中傷に耐えられたということは、自分の言動に確信があったからである。少女期の南北戦争の戦死者の家族の、時間も勲章も埋めることのできないその悲しさを身近に見ていたからである。いかなる戦いにおける犠牲や被害も、軍隊だけでなく兵隊やその家族全体に及ぶ。南北戦争のようなアメリカ国民同士が民主主義と人間平等のために戦った場合は、後の空しさは尚更であることをアダムスは心に刻んでいた。

## 2 女性本来の特性を生かした職業

### 一命を癒し、再生することは女性性の根源一

この二人の偉大な女性は、平凡な社会の底辺の人々の命と生活を守るために、生涯を捧げた。高次元でも抽象的理念でもない、現在平和な国の殆どの人が享受できている平凡に暮すために。ここに女性という言葉配すると差別と言われるかもしれないが、二人ともそれが女性の使命と疑わなかった。この当たり前の食事と育児、看取りを通じて日々の生命の再生に命の輪廻を司る母性という深い力が働いているのでないだろうか。

これはユングにいわせればグレート・マザーの原型<sup>19)</sup>として、また古代文明の儀式や壁画、土像にも女性の命の再生の力として古今東西、人類の命の源流として流れている。女性は食事、食物、育児、看病を通じて自己も成長、精神的変容を遂げるという生命変容の秘儀である。<sup>20)</sup> ゆえに毎日生命の再生を司っている女性は、平凡な暮らしの繰り返しでも日々新たにいられる。生活の中の自然が減少した現在、どれだけこの根源的の生命の再生サイクルが作用しているか疑問であるが、なお多くが子供を産み育て、食事をエネルギーとする生活をしている以上、アダムスが宗教的なより所を古代ローマキリスト教の福音に求めたように、人の原始本能に心身を委ねることも、新たな無垢な生命力を得ることにつながるかも知れない。

先進国の都市生活と働き過ぎにより、本能的防衛機能が弱まり過労死に至るという現象。また女性の多くが看護婦、教師、福祉職についている傾向などを見ると、逆ユートピアではないが、人間の原始の声に耳を傾けることもあながち無駄ではない。そして看護の神髄を突き詰めたナイチンゲールにいわせると、「看護とは自然の癒しのプロセスが妨げられないよう暮らしを整えることであった。この暮らしを整えるという表現は、病気とは暮らしのありようによって生まれ、またそれによって癒されていくという前提がある。」<sup>21)</sup> そのため病院での居住性を改善し、居心地の良い、快適な居住空間を病室に確保しようとしたことが、当時の建築学の最新性を盛り込んだ「病院覚書」の中に見られる。「看護覚書」、「病院覚書」も常に患者の要求に合わせて、患者の快適さを最優先にしての看護、病院の在り方を追及しているところが、古くとも現代看護に通じる新鮮さを失わない所以である。

ナイチンゲールの健康観によれば、「病気とは外因によって侵されたり、内因によって衰えたりする過程を癒そうとする自然の働きであり、それは何週間も何カ月も何年も前から気付かれずに始まっていて、このように進んできた以前からの過程の結果として現れたのが病気という結果であり、病気とは回復過程である。」<sup>22)</sup>

### 一心と身体をの生命力を生かす看護一

からだとこころのとらえかたとして、素朴とも非科学的ともみえる極めて古くて新しい疾病論は、現在のホリスティックヘルス<sup>23)</sup>の先駆けとも言えよう。観念として人間のからだと魂を一体の切り放せないトータルなものとして考えている。「看護覚書」の「変化」という章では、「患者に変化ある生活環境を与えることは病気回復の重要な手段である。」とし、気持ちのもち方や意欲の方が薬や治療よりどれほど病気の回復に影響するかを述べている。「入院患者が病室の生命のない壁ばかり凝視させられるところの苦痛を和らげる手だてとして、誰もがもつ自然への希求を満たすことが、いかに生きる力を与えるか。陽光のさしてくれるだけでも患者の神経をなごませる。患者に必要なのは、自然が与えてくれるあの感銘なのだ」<sup>24)</sup>「詩人たちは大自然の魅力を情熱を込めて歌い上げる。しかしおおよそ大自然の中で魂を貫かれるような歓喜といえども、ロンドンの裏通りに閉じ込められた病人たちが、どん

ぐりやとちの実を高さ6インチばかり育て上げるその喜びにはとても及ばないであろう。』<sup>25)</sup>

「多くの人々は内科的治療が、すなわち病気を癒す過程であると思っているが、内科的治療は外科的治療が手足や身体の器官を対象とするのと同じに、身体の機能を対象とする外科的治療である。内科的治療も外科的治療も障害物を除去せずには何もできない。どちらも病気を癒すことはできない。癒すのは自然のみである。』<sup>26)</sup> 極めてエコロジカルな発想、病気観、身体観である。このエコロジーなる概念の体系化をアメリカにおいて広めたのは、エレン・スワロー<sup>27)</sup> という女性科学者で、ちょうどナイチンゲールと同時代の人物である。彼女は生活の場から社会と自然を考え、初めて水と土、大気に関する環境科学と生活の科学を結び付けて体系化した。またこのアカデミックな科学と生活運動そのものをエコロジーと名付けた。まさに女性的視点の現れとも言えよう。

産業革命以後の工業化が急激に都市を変えていく頃、自然は征服し、支配するものという機械論的自然観が大手をふる時代で、石炭燃料の利用により重工業がさかんになり、工場からの排気と廃液が溢れ、空気や水が汚染され、環境破壊への危惧を本能的に感じたのは女性であった。互いに合い交えることない二人の女性が看護と家政学の分野で人間の生活を自然環境の中で考える視点を確立していたのは偶然ではない。わが国でも環境保全のため、河川の水汚染、ゴミ問題など市民団体で活動しているメンバーの多くは女性である。

そしてナインチンゲールとスワロー同様、アダムスもこの生活と自然、そして命という女性的な視線をそのまま社会に向け、ソーシャルワーク、児童福祉、社会調査の分野で女性の特質である命と生活を守る闘いを社会化した。そして多くの仲間とともにハルハウスという拠点で後輩や若き人材を育て、彼らはソーシャルワーカー、社会事業家、行政官として社会に羽ばたいて行った。その動機は貧困のために深夜労働で体を壊し、お金の誘惑から身を崩す少年少女であり、路地裏の不衛生なごみ置き場で戯れる幼児を守りたいという情緒的衝動であった。アダムス自身の幼少期は母親がいなかったとは言え、環境には恵まれ自然の豊かさを糧として成長できたことを幸運としている。シカゴスラムの児童を取り巻く社会状況を改善しようとして、少年クラブの活動を行い、一方衛生監視員、保護監察官の多くの行政職員がハルハウスから生まれた。日本

という保健婦や児童相談所、家庭裁判所の職員である。

ナイチンゲールにも子供の生命力に言及した箇所がある。ロンドンの都市化の環境汚染から子供の健康が害されて、田舎の子供のような赤くて健康そうな顔色が消えているのを嘆き、「田舎に滞在している間は元氣一杯でバラ色のほほをしている子供達の多くが、町での生活では信じられないほどあっと言う間に弱々しい温室植物に変わってしまい、親たちは子供達が一時間ほど新鮮な空気や寒気にさらされたと言って、彼らの生命が危ういかにように気をもむ有り様である。彼らは人工的に整えすぎた過保護の温室生活へ移植された結果、こうなるのである。」

「子供達には新鮮な空気が入り、明るく日当たりよく、広々とした教室、涼しい寝室とを与え…あくまで自由に子供自身の考えに任せて、指図はせず…もっと子供に解放と自然を与え…もっと食べ物に気を使い、薬を使うのはほどほどにしよう」<sup>28)</sup> 現代の過保護の母親に読んでもらいたい育児の基本である。また人間について機械論、医学モデル<sup>29)</sup> で押し切るのではなく、エコロジカルな生活モデルを前提としているところも古くて新しい。

### －劣悪な都市の貧困生活－

ナイチンゲールも都市化の生み出すマイナス面、資本主義の過度の利潤追求が、市民の健康、環境、快適さを侵食していくことを冷静な目で観察している。その鋭い観察眼は、建築物も建築業者の儲け主義により衛生環境が犠牲にされ、女性のファッションも仕立て屋の儲けのため健康や行動性、着心地からかけ離れた華美な窮屈なものであると嘆いている。天蓋つきカーテンで囲まれたベッドも湿気を帯び不衛生きわまりないと、清貧の思想ではないが、多くの富が逆に人間的健康を阻害していることを指摘している。<sup>30)</sup>

その一方、ロンドンスラムの貧しい家庭の暮らしにも通じていた。「人々は副食のないことが多くパンとお茶のみの食事が多かった。そのためコーヒーにはチョコリという代用品がよく使われ、ティーポットには毎日1さじのお茶が継ぎ足され、せいぜい月に1度くらいしかポットを空にせず、その間ずっとストーブでお茶をたてて飲んでいる。」<sup>31)</sup>

ロンドンの貧しき者たちの悲惨な生活、大都市のスラムの状態は、特にイースト・エンドは1889－1901年の間、チャールズ・ブースの貧困調査の対象となった

ほど劣悪を極めた。リバプールの船舶業者で社会改良家であったブースは(1886-1910) 貧困の数量的把握を目的として地域調査を実施し、1903年に17巻の報告書を出版した。これが後のイギリス社会保障制度、年金制度の成立に影響を与えた。そして労働者が働くため食べる最小限にも足りない生活水準を貧困線以下として定義したロートンリーによれば、ヨーク市の3割が貧困線以下という調査結果を出した。この二人にさきがけて、ナイチンゲールは陸軍やインドで調査を行い、アダムスはブースを見習ってシカゴスラムで地域住民の生活や児童の状況など意欲的に調査している。このように社会調査とは、社会事業、社会保障を充実させる時の客観的現状把握として、重要な学問領域でもある。1900年以前のロンドンでは、人口密度が高く不潔で空気を始終汚染する工場が立ち並び、公衆衛生の遅れは歴然としていた。ナイチンゲール自身がロンドンの公害地区とよび、そのようなスラムでは1部屋に家族全員がひしめき、トイレも各部屋に整備されてなく、室内便器が使われ、共同水道、共同洗い場で我慢していた。貧困層への救済は国家的には救貧法による労役所、民間では上流階級からの教会、学校、病院への寄付などの慈善行為のみであった。この社会救済事業として、T.J.バーナード(1845-1905)による児童施設、アーノルド・トインビー(1852-1883年)などによるセツルメントなど、わずかにあったものの、大きな発展は20世紀を待たねばならなかった。そんな中で貧困と病苦に喘ぐ人々に憐憫の情と同時に義憤を感じずにおれないナイチンゲールは、「ぎりぎりですらしている世帯を目の当りにみて公立病院に寄付さえしていれば人は自分の全責任を果せるのか」と厳しい問いを発している。<sup>32)</sup>

このようなナイチンゲールの批判と焦躁感は決して無駄ではなく、1875年に圧迫され生活の苦しい中産階級の患者を含めて、専ら貧しい人のためだけに熟練看護婦を提供するという目的を掲げた「首都圏ならびに全国看護協会」の設立となって実を結んだ。ナイチンゲールは在宅看護の充実につながるとしてこの種の組織創設を熱心に支援した。発足に際してなぜ貧しい人のためのみにこだわったかということ、「もしある施設が貧富両者に向けた熟練看護婦の提供をし始めるとすれば、特にそれが採算を重視しようとするれば、結局富める者ためのみになってしまう。」<sup>33)</sup>と人間社会のエゴをよく見定めている。合理性と資本主義の利益追求

が加速し始めた19世紀後半の時代の性向をよく熟知し、かと言って人間の欲の醜悪さに悲観的にならず、目的を実現する現実主義者の冷めた面がよく現れている。

下層階級の生活の劣悪さと衛生状態を物語る記述がある。「以前に比べれば衛生改革によって水道はかなり普及した。2、3年前には下水によって汚染された水道が使われていた。その結果ロンドンでは5歳にある前に5人のうち2人が死亡する。農村でも幼児死亡率は3分の1に達していた。」<sup>34)</sup>この死亡率は乳幼児だけでなく、病気や看護、健康維持の知識がないので治る病も悪化し、全体に高かった。「かれらは部屋を暖めずじたり、換気口をふさいだり事態をかえて悪化させてしまう。このような住居で、無理な姿勢、短い食事時間と栄養不足、苛酷な長時間労働によって、多くが胸部疾患、それも肺結核で若死にするという事実が不思議といえるだろうか」<sup>35)</sup>産業革命の工場労働によって、利益追及の劣悪な職場状況に加え、住宅環境、町全体の環境も悪化していた。

#### －共感という感性による社会改革－

ナイチンゲールは住居衛生の維持のための5つの基本の要素として、清浄な空気、水、適切な排水、清潔さ、陽光を挙げている。まったく日の差さない狭い街路の裏町や地下室では病人のでののが当然であり、貧困世帯の病人は医療費がないので救貧院に入るか、自宅療養しかなかった。これらの自宅療養の病人には、地域看護婦の任務こそ重要であるとして、前述の貧困者のための「首都圏ならびに全国看護協会」の設立に熱意を注いだのである。

「看護婦が身をもって掃除をしてほこりを払い、ぞっとする汚れや不潔を取り除き、洗い流し、換気をし消毒し、窓をこすり暖炉を掃除し、古いベッドのマットや絨毯を運びだし、埃をふり払いそれを敷きなおして、綺麗な水を汲んできて釜を満たし、病人や子供達を洗い、ベッドを作るなどして見せる必要がある。」<sup>36)</sup>これを地域看護婦が貧困者の家庭で行ったのである。この具体的実践指導は現代の在宅介護、ホームヘルパーの養成でなされている教育に引けをとらず極めて新しい。

介護の処置では極めて具体的正確さを極めているが、「あなたがたは教科書にかいてあるからと言って、患者の食事を決めることはできない。『炭素化合物と窒素化合物を何割にすれば完全な病人食ができるなどと、

薬の処方方を調合するようにして、人間の身体を調合することはできないのだ」<sup>37)</sup>のごとく、生活の中での科学追求の限界も承知していた。“生命の神秘、自然の力に対して謙虚に、しかもできる範囲で科学的に”これが、ナイチンゲールが言う看護の原則である。そして看護の神髄である観察、共感の基本原則を忘れるわけにはいかない。

共感是对人援助であるヒューマン・サービスの仕事においては必須の能力で、波長を合わせるとかチャネリングという相手の心を理解する能力であり、洞察力の裏付けでより深いものになる。これはナイチンゲール、アダムス両者とも共通していた。「アダムスは建設的オーガナイザーであり現実的で、卓越した洞察、確信、独創性に満ちていた」「彼女は謙そんしくとも共感することができ。現実を見失わずに無限の共感能力があった。」このような多くのコメントがアダムスに関する新聞記事にみられる。

アダムスは貧困救済と平和推進という2つの分野でパイオニア的仕事をしたが、道半ばにして自ら強い確信を持っていかなる周囲からの誹謗、中傷にも惑わされず進んだ。どちらもアダムスの言葉を引用すれば、「未来の世代がその上に築くべく重要な基礎をつくるためと信じていた」からである。そしてナイチンゲールにとっても貧困救済はテーマであった。故にこの偉大な二人の女性は、“命と暮らし”というプリミチフ（素朴）なキーワードを掲げ、貧困と病いを無くすために邪魔する勢力、誤解と中傷と闘った社会改革者だったと言える。

そしてこの二人の残した理想は、看護も社会事業も未開拓の時代だったから斬新で意味があったのではなく、現代の生命の倫理、社会福祉の倫理が問われている混沌としたこの時代にこそ、尚更含蓄深く、命を育み共に暮らすのために人間本来の感性と気概をもつことの大切さを示してくれる。

### 3 エピローグ

#### —歴史的伝記から学ぶ意義—

アダムズが50歳にして「ハルハウスの20年」によって自分の半生を振り返ろうとした時、次のように述べている。「いまだ先鞭をつけた社会事業はその役割を社会で担っており、多くの同士も熱ある活躍の真っ最中、まだ成果を評価し、その役割の総括には時期尚早

であった。にもかかわらず様々な結果によりその経過の取捨選択をしたり、事実経過に手心を加えず、良きにつけあしきにつけ歴史の検証を経ず、未完成の事実を書き記すことは、後の公正な論議のために必要なことと考えるからである。」<sup>38)</sup>そして書き残すだけでなく、敢えてその著書を出版したのは、未完の慈善事業の組織化について書き残しておくことは、将来に価値あることと確信したからであった。ここにナイチンゲールとアダムスの二人の女性の生き方を、一世紀の歴史の検証を経た上で再び紹介するのも同じ理由からである。

歴史の選択は正直で厳しいものである。しかし後世の価値基準のフィルターで過去の史実を選択するのであるから、時代の色付けを免れない。当然現代的スポットを当てられた二人の現代での肖像画浮かび上がっているだろう。二人は19世紀から20世紀への、近代から現代へのつなぎの時代に、上流階級から貧困層への架け橋として生涯を全うした。およそ二つの立場の異なる集団の間に架け橋となれる人物は、双方への共通基盤、またはどちらからも信頼される人格と二つの価値観を理解できるスケールをもたねはならない。その意味で、二人とも常に一個人で行動した極めてスケールの大きな人物である。そして影響力は言葉とペンのみであり、行使した力は常により弱いものたちへの援助の形をとった。

この世には、人種、国、階級などあらゆる立場の違いが存在する。健丈者と障害者の間には、いかなる共感のエネルギーでもこえることのできない高い壁、目をみはるハイテク技術をもってしても埋めることのできない深い溝がある。にもかかわらず同時代、同じ社会の一員として出会った両者は、見て見ぬ振りをしながらも、仕方なく肩を触れ合わせ、共に泣き笑いながら生きて行かねばならぬ。

ホロコースト<sup>39)</sup>による数百の犠牲の上に約束の密の土地を手にいれたさまよえる民ユダヤ人、そのイスラエルの土地をわが祖国と歴史以来名実ともに信じて追われたパレスチナ人<sup>40)</sup>、その土地の主導権を争って、いつ果てるともしらぬテロ活動、殺し合いが続く。しかし怨念は怨念を呼び、復讐はまた復讐を呼ぶ。どちらかが絶滅したり片方が徹底的に相手を潰滅させないかぎり二つの宿命の民は、その地球の大地からすれば点にしか過ぎない小さな土地で、互いに怒る肩をすほめて共存し、同じ地に暮らしを営まねばならぬ。ボス



ニア紛争<sup>41)</sup>におけるクロアチア人、セルビア人もしかりである。それがつらい現実である。

だからこの世で多くの無益な戦い、戦争があり、それを助長する武器や戦闘機が生産され、核実験がなされようと、人は話し合いと民主主義の価値を信じ、平和を説く。多くの場合、平和交渉が成就せず、映像の世界のような近代ハイテク戦闘で、兵士のみでない民衆の多くの夥しい負傷者がでようと、それでも人々はそれらの手当をし、爆撃で壊れた建物を修復し孤児を育て、難民となった多くの市民に食糧と一時の雨梅雨を凌ぐテントを提供する。ヒューマニストだとか宗教的ミッションだとかいろいろこじつけることはできるが、生き残っている人を助けるため、何かせずにいられないという理由からだ。

歴史は俯瞰すれば、常に何かを築く人とそれを崩す人の織り成すドラマであった。その中心になって権力の争奪を繰り広げる支配層、そしてその周囲でうごめく一般民衆の織り成す綾織のようなものかもしれない。もし構築と破壊の繰り返しが人類の潜在本能の表出、生きている証であるなら、もはや人間の業と嘆いたり、終末を予期して悲観ぶるのはやめよう。無益な争いや破壊衝動を超越できるほどの人類進化には、まだまだ歴史的時間が必要で現在の混沌は当分続くのだから。

#### －命を破壊し蝕むより、育て養う側に－

もしそうなら人は皆、生きている限り、どちらの立場に与するか常に思い定めなければならない。そして壊し蝕む人より、それを防ぎ、再び築く人になろうではないか。悲憤慷慨、悲嘆にくれて無為に立ち尽くすのではなく、瓦礫の山から石を拾い、焼け跡を耕し、木や作物を植える。今日の雨露を凌ぐ住いを準備し、ひもじい家族の命を養う食物を準備する。多くの人がそうした社会の黒子となって営々と現代繁栄を支えてきた。今回焦点を当てた二人の女性もまさにその生き方をしてきた。ただその働きが非凡で、かつ偉大であったので世の注目を集め、歴史に名を留めた。

現代は個人の英雄が出現しにくい時代である。個人の価値観がマイクロ化して、卑近なモノやカネに矮小化し、正義や宗教など抽象的なもの、社会や国家など個人を越えたレベルのものに価値を投影、同一化しにくくなった。これは東西の冷戦後の共産主義国家の崩壊によって、主義やイデオロギーの黄金の輪がことごとく消滅したと無縁ではない。しかし物質主義や個

人主義として限りなく価値が個人に収斂していくアノミー型社会<sup>42)</sup>は、デュルケイム<sup>43)</sup>が警告を発したように、価値観が浮遊する大衆社会に拡散していく。そんな時代に個人と社会とそれをつなげる家族、生活、仕事というものの手ごたえを再び各個人の手でつかむために、歴史的功績を残した人物の生涯とその仕事への姿勢をなぞることは、大きな無意味がある。

その文脈で現在表面的物質的繁栄の影で、高齢化社会による介護、命に関する終末医療、飢えや疫病とは別の生命感の貧困、人間関係や情緒の希薄さ、都市化による自然破壊など進歩の中の陰りを感じる今、暮らしと命の重みを生涯をかけて追及し、世に問うた二人の女性の軌跡の紹介をした。

多くの庶民は自らのささやかに暮らしと命を守りつつも、平凡であるかゆえ歴史の中で偉大に気高く生きた人物の生涯に準えて、理想と思想を表現するしかない。伝説的存在の二人の女性の多くの資料から、その思想のエッセンスだけをここで紹介したのは、女性だけでなく男性にも肩の力を抜いて命と暮らしの大切さに気づいてもらいたいと願うからである。人間の可能性を信じて自分の守備範囲でできることを、たとえ小さなことでも人のため、社会のためにする使命感を燃やしてほしい。そして福祉や医療の分野に興味のある感受性の豊かな若い世代は、この二人の生涯に接し、自分の選んだ仕事こそ人の暮らしと命を守る貴い仕事であることを確信し、誇りをもって迷わず進んで欲しい。

なぜならこの生き方こそ、ナイチンゲールとアダムスの選んだ道であり、二人に類する多くの人々が連なり、これからも次の時代にも大勢の人の力を必要としている道程だからだ。

#### 注

- 1) アメリカ合衆国禁酒法は1919年10月に施行された。州ごとに存在した禁酒法が第一次大戦後の高揚や女性の参政権運動の広がり、道徳主義の復興などから全国的規模になった。一方、大衆文化娯楽の浸透とギャングの結び付きによる、酒の密造、販売などが横行した。
- 2) ノーベル賞賞金：1896年ダイナマイトの発明者、スエーデンのアルフレッド・ノーベルの意志による基金の果実による賞金制度で、物理学/化学/医学および生理学/文学/経済学/平和に寄与した者に送られる。賞金は650万スウェーデンクローネで約1億5千万円(1993年)

- 3) 1929年のニューヨーク株価暴落に始まる銀行などの大不況の頃、それへの経済対策を掲げて就任したルーズベルト大統領の不況対策のもらもろの法律を総称する名前。これにより公共投資として大規模なテネシー渓谷開発、全国産業復興法などが成立。
- 4) 1933 - 1945の長期にわたり大統領をつとめたフランクリン・ルーズベルト夫人。1941年にイギリスのチャーチルとともに大西洋憲章を結び第二次大戦を勝ち抜いたが、1945年2月のヤルタ会談出席後、勝利に一步のところまで亡くなった。障害をもち車椅子だった大統領を公私にわたって補佐した夫人は力ある賢夫人として有名。
- 5) 「女性による陸軍病院の看護」 湯楨ます監修、薄井坦子他訳『ナイチンゲール著作集』第1巻 現代社 1977年、40 - 41頁
- 6) 同上 42頁
- 7) 「看護婦と見習生への書簡」『ナイチンゲール著作集』第1巻 454頁
- 8) 「イントの病院における看護」『ナイチンゲール著作集』第1巻 425頁
- 9) 「看護覚書」『ナイチンゲール著作集』第2巻現代社 1983年、122頁
- 10) 同上 43頁
- 11) 同上 100頁
- 12) 同上 66頁
- 13) 小玉香津子『世界伝記文庫 ナイチンゲール』1975年 219 - 220頁
- 14) 同上 221頁
- 15) 同上 222頁
- 16) 「病人の看護と健康を守る看護」『ナイチンゲール著作集』第2巻、125頁
- 17) 前掲「看護覚書」 125頁
- 18) 同上 71 - 72頁
- 19) ユンク心理学における人間の心理的原型の中のひとつ。老賢人、厳父、異性への投影であるアニマ（男性か女性へ）とアニムス（女性か男性へ）などの一つ、生命の誕生と育成を象徴するイメージである。
- 20) ノイマン、E.（福島章訳）『クレート・マサー』ナツメ社 1982年
- 21) 金井一薫「ナイチンゲールにケアの本質を探る」看護展望 別冊2号、1986年、153頁
- 22) 前掲「看護覚書」1頁
- 23) ホーリスティック・ヘルス：肉体と精神の両面と自然を合わせて健康の管理と治療をしようとする医学、保健学である。ストレス解消、精神安定、自分で治療しようとする意志と自信を重視する。
- 24) 前掲「看護覚書」136頁
- 25) 同上 98頁
- 26) 同上 211頁
- 27) エレン・スワローについてはマサチューセッツ工科大学（家政学）のロバート・クラークが書いた伝記である「エレン・スワロー：エコロジーへのはるかな旅」ダイヤモンド社 1986年に詳しい。
- 28) 前掲「看護覚書」244頁、240頁
- 29) ソーシャルワークにおいて医学の治療者のように診断される対象としてクライアントをみるのを「医学モデル」とし、社会学、生態学的、心理学、システム論など多様な理論を組み入れて問題と人をとらえるのを「生活モデル」という。
- 30) 前掲「看護覚書」125頁
- 31) 「町や村での健康教育」『ナイチンゲール著作集』第2巻 173頁
- 32) 前掲「看護覚書」238頁
- 33) 「貧しき病人たちのための看護」『ナイチンゲール著作集』第2巻 65頁、64頁
- 34) 前掲「看護覚書」32 - 33頁
- 35) 同上 17頁
- 36) 前掲「貧しき病人たちのための看護」55頁
- 37) 前掲「看護覚書」114頁
- 38) ジェーン・アダムズ（柴田善守訳）『ハルハウスの20年』（社会福祉学双書）岩崎学術出版1978年、前書き2頁
- 39) ホロコースト：大虐殺とか焼き殺すことをいう。具体的には第二次大戦後のナチズムによるユダヤ人の大虐殺をいう。
- 40) パレスチナ問題：中東問題とも呼ばれ、第二次大戦後パレスチナに独立したイスラエルと、エジプト、ヨルダン、シリア、レバノンなどが、第一次から第四次まで領土を巡って戦った。1991年の和平会議において一応停戦をみ、パレスチナ人独立を求めるPLOとイスラエルとの暫定自治協定など和平共存の歩みも見えるが、ガサ地区などではパレスチナ人によるテロなど小競り合いが続いている。
- 41) 旧ユーゴスラビア崩壊後の分裂独立にかかわる民族紛争で、特にクロアチア人、モスレム、セルビア人か宗教、領土の問題や民族粛正など残虐な行為など紛争が拡大した。99年20万人以上の犠牲者と300万人以上の難民が出て、クロアチア、モスレム人救済のため平和維持軍を派遣、アメリカの空爆などを経て落ち着いた。
- 42) 人間の欲求に規範となっていた道徳的拘束力が失われ、欲求不満と失意に悩まされる状態。これをマートン、マッキンキーハーなどアメリカの社会学者が目標の喪失、無気力感、自己疎外の精神状態をあらわすのに用いた。
- 43) フランスの社会学者（1858 - 1917）。現代社会学の創始者としてデュルケム学派もあるほど。平常と病理の区別に関する理論を『自殺論』、『社会分業論』において展開した。アノミー論と犯罪理論は現代社会病理学に大きな影響を与えた。